政治的世界の形成原理としての自愛について（一二）

今井仙一

三八　諸民族の自愛について

わたしの手許にある一冊の辞書は、「国家」を規定してつぎのように述べている。いわく、「国家とは、一定の領土における、すなわち限定された国境の内部における、一民族の組織された政治的統一 die organisierte politische Einheit eines Volkes ——統一的な立法と統治と行政とを（また、必ずしも常にというのではないが、多くの場合、統一的な言語と文化とを）有するところの政治的統一であり、その中に、全体の保存と上昇 Erhaltung und Steigerung des Ganzen に向けられた感情、思惟、意志があらわとなる」。*

* Philosophisches Wörterbuch von H. Schmidt, op. cit., S. 629.

右の規定において、国家は、一民族の政治的統一とみられている。しかし現実の国家は必ずしもそうしたものとは見なされえないであろう。なぜなら周知のように、一方一つの国家が幾つかの民族を自己のうちに包含する場合もあれば、他方また一つの民族が二つあるいはそれ以上の国家に分散して存在する場合もあるからである。すなわち現実の事態としては民族と国家とは必ずしも相覆うものではありえない。しかし、一つの国家に包含された諸民族は、も

しそれが可能ならば、それぞれ独立した一つの国家にまで自己を形成しようとの願望を秘めているであろうし、また二つあるいはそれ以上の国家に分散した民族は、機会だにあらば、一つの統一的な民族国家にまで自己を結集しようとの意欲を潜めているであろう。その意味で、現実において国家と民族とは必ずしも相覆うものではないとしても、しかも、在るべき形としては、一つの国家を形成するものは一つの民族たるべきであり、その限り、右の規定は一応正しいものとみとめられていいであろう。

あらゆる民族のうちには、自己を一つの国家にまで形成しようとのやみがたい衝動が潜んでいる。それは簡単に国家への胎動とよばれてよい。この胎動の底にあるもの、それは民族の根源的自愛である。自己保存の原衝動と相即した自愛――意識をふかくその底へと超越した、存在論的な意味での自愛である。この自愛のゆえにあらゆる民族は、つねに一つの国家たらんことを希求してやまないのである。けだし国家とは一民族の自主的・独立的存在形態をさすものにほかならない。ツキュディデスの簡潔な規定によれば、「一つのポリスは autonomos, autodikos, autotelēs である」という。* 自己自身の法律を、法廷を、長官を有するの謂いである。要言すれば、他民族の支配に服従せず、自己みずから自主的に、主体的に、自己の存在を維持し、自己の存在様式を限定しうること、これが一つのポリスの本質として語られたのである。ギリシア人はそれをポリスの自由として捉えた。** 近代の国家学者はそれと同一の要件を国家の主権として表現した。用いられた言葉は同じではない。しかしそれの目ざしている事態は一つである。いわく、他民族の干渉から自由に、自己みずから自己の存在を、行動を、あるいは運命を限定する権利を主張しうること、これが国家の本質的徴表と見られたのである。そして右にいわれたように、あらゆる民族は、その底にひそむ根源的自愛のゆえに、そうした独立国家にまで自己を形成しようとの衝動に駆られざるをえないのである。ナショナリズム、すなわち民族主義というのは、そうした国家への胎動の自覚的形態にほかならない。

* Thukydides, Lib. V.18.——わたしはこの個所をつぎの書から孫引きした。Hugonis Grotii *De jure belli et pacis* by W. Whewell D. D., Cambridge 1853, Vol. I, p. 111.

** バーンズは語っている。「政治的自由は二つの相をもつ。まず第一に、それはわれわれの属する集団の独立を意味し、一般に外国支配と呼ばれるものに対立する。そして第二に、それは、各個人が彼にとって最善と思われることをなしうることを意味する。すなわち、政治的自由というのは、まず第一に、少なくとも政治的問題の解決における、諸集団の相互独立を意味する。われわれはイギリスにおいて、フランスにおいて、そしてドイツにおいて、この独立をもっている。われわれはそれを好ましきもの、保持され発展させらるべき或るものとみなしている」。そして、バーンズによれば、この意味の自由が初めて自覚されたのは古代アテナイにおいてであった。それゆえ彼はそれを「アテナイ的自由」Athenian Liberty と名づけているのである。C. Delisle Burns, *Political Ideals*, 2ed. 1917, p. 29.

わたしは右にナショナリズムをかりに民族主義と訳してみた。しかし、その起原において、ナショナリズムというのはおそらく一つの漠然たる感情、潜在意識的な感情にすぎなかったであろう。すなわちそれは最初は一つの主義あるいはドグマであるよりも、むしろ一民族に共通した一つの気分にすぎなかったのであり、そのかぎりナショナリズムは、民族主義というよりも、むしろ民族意識と訳さるべき一面をもつものであるであろう。こうした原始的な民族意識を一つの明確な民族主義にまで高めるもの、それは多くの場合他の民族との遭遇である。というのは、ちようどひとは病気を媒介してはじめて自己の健康の意義をふかく痛感せしめられるのと同様に、一つの民族もまた、自己の存在の危機に当面することによって、はじめて自己の民族的存在の意義に目ざめ、かくて、それまで漠然たる感情あるいは気分にとどまっていたものを、明確な民族的自覚にまで高めるのだからである。すなわち一つの民族において、民族主義と呼ばれるにふさわしいナショナリズムを熾烈に燃えあがらせたもの、それは大抵の場合外敵との遭遇——すくなくとも、そうした遭遇の可能性であったのである。この点に関しては、さきに（一五において）グンプロヴィッチが、いまだ他の集団との接触を知らぬ人間集団をさしてつぎのように語ったことが想起されていいであろう。

いわく、「そうした人間集団は、それ自身からして一つの国家的発展にまで到達することは断じてありえない。外的世界のあらゆる影響から孤立させられ、異邦人からのあらゆる圧制、あらゆる『搾取』から守護されて、そうした集団は永遠の没国家的沈滞のうちに留まるであろう」。また、「いかなる異邦人もその集団と遭遇しないとすれば？――すればそこにいかなる衝突もなく、いかなる闘争もなく、いかなる発展もない。すればその集団は幾千年も果実や木の根、または魚や甲殻類で生き、また幾千年も野獣を狩猟し、そして未開民族の沈滞状態のうちにとどまるのである……それらの民族は猿の段階にとどまっている」。

そうした牧歌的な未開民族のうちに民族主義の炎をかき立てるもの、それは敵対的な異邦人との接触であった。このことはしかし必ずしも先・国家的な未開民族についてのみ妥当するのではない。かえって、すでに一つの国家組織にまで自己を形成した諸民族においても、異邦人の侵略が契機となって、それまで殆んど意識にのぼらなかった民族的感情があたかも燎原の火のように燃えあがる場合もすくなくはないのである。たとえばバーンズは語っている。「ルネサンスにつづく諸世紀を通じて、そしてナポレオンの時代にいたるまで、ナショナリズムは、一つのプログラムであるよりも、むしろ一つの感情であった。だが、それは強い感情であった。それはポーランド分割（一七七二年）に際して一つの真の政治的事実として感受された。それは一八〇六年から一八一三年までフランスの統治に対するスペイン人の抵抗に力を与えた。それはモスクワにおけるナポレオンの敗北を生じ、またドイツの復興を生み出した。そして、ウィーン会議の政治家たちによって無視されたとはいえ、それはなおも生長をつづけ、ついに一八四八年ごろにいたって、一つの明確な政治的理想となったのであった」。* また、現代の世界各地域における民族主義の滂湃たる盛りあがりを叙してフリートマンは語っている。「ある程度まで、ナショナリズムの復興は全く自然であって容易に説明されることができる。ヨーロッパでは、それは主としてドイツの侵略のあの残忍性そのもの、殺人、飢餓、堕落

を通じて、誇り高く創設後ながい年月を経たヨーロッパ諸国民、わけてもスラヴ系人種の諸国民を根絶しようとしたナチ政体の計画的企図、に対する一つの反撥である。ロシア人、ポーランド人、ユーゴスラヴィア人、チェック人、ユダヤ人、その他諸国民の反撥が、彼らの民族的同一性の熾烈な再主張であったことは、なんら異とすべきことではない。ポーランドおよびチェコスロヴァキアは、彼らの国に何世紀かのあいだ定住してきた幾百万のドイツ人を追放するというまで極端な処置に出た。その点まではナショナリズムは、たんに抑圧と搾取とに対する自然的反撥であり、それはちようど、ドイツのナショナリズムが、一八〇六年から一八一二年にわたるナポレオンの占領によって燃えあがったのと同様の現象である。他方また東欧の共産諸国、ならびに太平洋および極東地域においては、民族的独立こそ、西欧の支配からの解放闘争において到達さるべき直接的目標とされているのである**」。

* C. D. Burns, op. cit., pp. 184-5.

** W. Friedmann, *An Introduction to World Politics*, 2ed., London 1952, pp. 45-46.

他者による抑圧と搾取とに対する熾烈な反撥、他者の支配に対する解放闘争の直接的目標としての民族的独立、すなわち主権的国家の形成、これはあらゆる民族に共通する一つの自然的衝動であり、そしてこの衝動の底に潜むものは、右に言われたように諸民族に固有な自己保存の本能、すなわち根源的自愛である。なぜなら自己保存の本能はたんに個々の個人にのみ存するのではなく、あらゆる人間集団にも存するのであり、特に民族における自己保存の本能は、ある意味で、個人のそれよりもより強く根深いものとも見られるからである。というのは、さきに（一〇において）指摘されたように、個人にあっては、いわゆる自己犠牲的な行為、他愛的あるいは仁愛的な行為、あるいはまた自己のぞくする国家あるいは階級のための自己献身的な行為は、徳として賞讃されることも可能である。しかし、民族の場合、そうした行為がはたして徳でありうるか否かは十分に問題とされることができる。というのは、一つの民

族は、他者に自己を犠牲として捧げることによって、ただちに自己に帰属するもろもろの個人をも犠牲に供することとなるのであるが、それは、個人の自己保存すなわち自愛の基本的権利と相容れぬものとも考えられるからである。かくて民族にあっては、自己犠牲あるいは自己献身といった美徳は存しえない。いわゆる宋襄之仁なるものは存しえない。そこにはただ自己保存の絶対的要請あるのみである。この点に関してはグロティウスの見解が参照されてよい。すなわち彼はまずキケロを援用しつつ自然法の第一原理を自己保存として規定する。そこからして彼の戦争観は展開される。はたして正しき戦争なるものはありうるか。彼はそれを肯定し、そして語っている。「自然の第一原理〔自己保存〕のうちには、戦争と相容れぬものは何一つ存在しない。いな、むしろすべてのものは戦争を支持しさえするのである。なぜなら戦争の目的、すなわち生命・身体の保存、および生にとって有用なものの保有あるいは獲得は、全くかの原理と合致するものだからである。そしてたとえこの目的のために暴力が必要であるとしても、しかもそこにも自然に背反するものは何一つとして存しない。というのは、すべての動物は、自己防衛という至上目的のための手段を自然によって装備されているからである……ガレノスは語っている、人間は平和と戦争とのために生まれた動物、ただし武器をもってではなく、かえって武器がそれによって獲得されうるところの手をもって生まれた動物であると。のみならずわれわれの見るように、子供は、誰にも教えられずして、彼らの手を武器の代りに用いるのである」。さらにグロティウスは、正しき理性、および社会の本性という観点から、自己防衛のための暴力あるいは戦争が決して不当でないことを立証し、ついで、同じ主張を、聖書の多くの個所を援用しつつ是証しようと努めているのである。*

* Hugonis Grotii *De jure belli et pacis*, op. cit., pp. 29 ff.

自己保存の原衝動を十全に満たしうること、これは地上のあらゆる民族にとって最初の、かつ最小限の要求であ

る。この要求のゆえにあらゆる民族は、みずから一個の国家たらんことを希求してやまないのである。主体的・主権的な一集団として、他の民族に対して自己を主張することを求めてやまないのである。そのかぎり、民族主義のゴールは国家であると言われてよい。しかるに、この国家は、やがて帝国主義の出発点でもあるのである。すなわち国家を媒介して民族主義は帝国主義へと転換する。というのは、国家の形成を通じてある程度自己の力に自信と自負とをもつにいたった有力民族において、やがて自己中心的に傾斜した求心的自愛が抬頭するのであるが、この自愛の政治的表現がすなわち帝国主義にほかならないからである。

帝国主義のもとにわたしは、他民族の犠牲において自己の領土を、富を、自負心を、限りなく拡大しようとする一民族のエゴイズムを理解する。周知のようにレーニンは、帝国主義を「資本主義の最高段階」として規定した。すなわち彼はマルクス的な経済史観の立場から現代の帝国主義を捉えようとしたのであった。そして事実、資本主義の成熟、世界的規模における独占金融資本の発展とともに、植民地征服と結びついた帝国主義が特に典型的な形で発現することは否定されえない事実である。しかしわたしは帝国主義をただ資本主義の一段階との相即といった特殊な経済的観点からのみ捉えようとはしない。わたしはそれをより広く、むしろ民族の求心的自愛との相即において捉えようとする。かくて、国家の形成を通じて自己保存の衝動を一応満足せしめえた一民族が、あるいはより以上の領土を、富を、生産原料を、または市場を求めて、あるいは内に増殖する人口のはけ口を求めて、あるいは単にその指導者たちの誇大妄想的な野望のゆえに、近隣の諸民族にその爪牙を伸ばそうと試みるところ、そのいたるところに帝国主義の萌芽は存するものと考えるのである。かくてたとえば古代において、ペルシア王クセルクセスが大軍を擁してギリシア遠征を試みたとき、あるいはアレクサンドロス大王が苦難多き遠征を通じて古代最大の帝国を樹立したとき、彼らの行動の底にあったものは必ずしもただ経済的要因のみであったのではない。まして資本主義の発展法則といった

ものであったのではない。むしろそれは無限に自己を、自己の生を、拡大しようとする民族的エネルギーの壮大な発露であったのである。経済的なもろもろの欲求はたんにその内容の一部を形成するにすぎない。それはグンプロヴィッチの言葉をかりて、民族の自己主張衝動 Selbstbehauptungstrieb と呼ばれてよい。いわゆる「自己を勢力あるものたらしめ、自己固有の本質を主張しよう」との衝動である。ラッツェンホーファーのいう「永遠の根源力」である。グンプロヴィッチによれば、この根源力は、より弱き個および集団においては、たんに衣食住の生産、外敵防衛、および生殖といった形でのみ自己を表現する。それに反してより強き個および集団においては、それは、暴力的な諸行動において、他の個および集団に対する圧倒、圧制、次第に大きい領土の略取、そして次第に多くのより弱き個および集団の支配、のうちに自己を表現するのである（一六を参照）。

根柢において同一の自己主張衝動が、一方より弱き個および集団と、他方より強き個および集団とにおいて、二つの異なる表現形態をとるというこのグンプロヴィッチの洞察は注目にあたいする。というのは、右に彼がより弱き個および集団におけるそれの表現として枚挙したもの、すなわち衣食住の生産、外敵防衛、生殖といったものは、わたしのいう根源的自愛の内容に相当する。それに反して彼がより強き個および集団における自己主張衝動の表現として掲げたものは、まぎれもなくわたしのいう求心的・エゴイスト的自愛の内容に匹敵するのである。そこからしてわたしは、自愛についてのわたしの上来の考察をグンプロヴィッチ風につぎのように要約することもできるのではないかとおもう。いわく、いわゆる根源的自愛と求心的自愛とは決して異なる二つのものであるのではない。両者は根柢において一つのもの、まさに人間における「生への衝動」にほかならない。ただこの衝動は、より弱き個および集団においてはたんに自己保存のための努力という謙虚な根源的自愛の域にとどまるのに反し、より強き個および集団においては、それは、他者の犠牲においての自己拡大という野心的な求心的自愛の形をとって現われるのであると。

ところで、一民族の根源的自愛の政治的表現はナショナリズムすなわち民族主義であり、それに反して一民族の求心的自愛の政治的表現はイムペリアリズムすなわち帝国主義であった。したがって民族主義と帝国主義との両者についてもグンプロヴィッチの論理が妥当せねばならないであろう。すなわちこの二つのものは一見ことなるごとくに見えて、しかも決して異質的な二つのものであるのではない。かえって両者は究極において一つのもの、すなわち民族の生そのものに相即した自愛的衝動である。ただこの衝動は、より弱き民族においてはたんに自己保存あるいは自己防衛に局限された謙虚な民族主義としてのみ現われるのに反し、より強き民族においては、それは、他民族の侵略、征服、支配といった積極的な帝国主義として現われるのである。したがってわたしがさきに、国家を媒介して民族主義は帝国主義に転換すると語ったのは、必ずしも奇異をてらった表現であったのではない。両者はむしろもと同根の双生児であり、したがってそれまで劣勢の地位にあった一民族が、緊密な国家組織を通じてある程度の力と自信とを獲得すると共に、それまでの消極的な民族主義の殻を脱して、積極的な帝国主義へと転ずることは、じつは自然の、あるいは必然の事態とみなされねばならないのである。*

* 民族主義と帝国主義との緊密な関連を示すものとして、わたしはつぎに二人の著者を援用しておきたい。まずフリートマンは語っている。「近代において、帝国的征服は、通常、ナショナリズムの倒錯 the perversion of nationalism の結果である。多くの国民は、彼らの近隣者たちに対して優越した政治的および物理的勢力を獲得した暁に、真のナショナリズムから帝国主義へと転じたのであった。二三の例のみをあげても、フランス、ドイツ、ロシアは、つぎつぎに、国家的強化から帝国的拡大へと転じたのであった……」。W. Friedmann, *An Intr. to World Politics*, op. cit., pp. 48-49.——またバーンズは語っている。「極端なナショナリズムの狭量な政治はしばしば集団嫉視あるいは集団敵対性を生み出した。フランスにおけるショーヴィニズム Chauvinism は、かつて、ドイツ的な一切のものに対する殆んど野蠻的な憎悪を生み出した。そしてあらゆる人種は、より大きくなると共に、それの地方的嫉視を帝国的政策と呼ばれるものにまで発展させる傾向をもつのである。かくてナショナリズムは帝国主義とちょうど同じだけ有力に戦争を支持し進歩を阻害する。じつさい、この二つの名前は、その悪し

き意味においては、同一のきわめて局限された政治的視野を意味するように見える。というのは、一つの小さい集団においてナショナリズムであるものは、その集団が強大となったとき帝国主義となるのだからである……」。C. D. Burns, op. cit., p. 192.

右に言及されたように、レーニンは現代の帝国主義を資本主義の最高段階に固有の現象として規定した。もっともレーニンはそれ以外の形での帝国主義を否定したわけではない。たとえば彼は古代ローマの帝国主義についても語っている。ただ彼は、革命家としての彼の立場にふさわしく、共産主義革命を通じて止揚さるべき当の目標としての帝国主義、すなわち資本主義の最高段階としての、それゆえにまた没落の一歩手前にあるものとしての帝国主義のみに彼の考察を集中しようとしたにすぎない。* それは、政治的実践の観点からみて至当であったと言われてよい。実践家の目はつねにただ現在にのみ向けられる。十九世紀から二十世紀にかけてひたすら革命家としてのみ生きたレーニンにとっては、ただ十九世紀から二十世紀にかけての特殊な、現代的な帝国主義と、そしてそれの特殊な経済的構造のみがまさに焦眉の問題であったのであり、はるかなる過去の帝国主義といったものはもちろん彼の関心の埒外におかれたのである。しかしたとえばトインビーが、「わたしの世界を『現代』、そしてツキュディデスの世界を『古代』として記録する年代学的表記法」は、地質学的あるいは宇宙進化論的な時間スケールから見てむしろノンセンスであり、「たとえ年代学がどのように語るとしても、ツキュディデスの世界とわたしの世界とは、いまや哲学的に同時代 philosophically contemporary であることが明らかとなったのである」と語ったように、** 史学的あるいは哲学的な観点からすれば、古代と現代とは、それらの著しい表面的差異にもかかわらず、しかも同じく人間の世界、人間の歴史の一断面として、そこに深い共通的本質を宿したものとみなされねばならないのである。わたしが帝国主義を民族の求心的自愛の政治的表現として、それの特殊性においてでなく、かえってそれの一般性において問題とするのも、

じつはわたしがそうした哲学的同時代性の観点に立つからにほかならない。

* 『帝国主義。資本主義の最高段階』の第六章においてレーニンは語っている。「植民的政策と帝国主義は、資本主義のこのと最終段階以前にも、いな、資本主義以前にさえ、存在した。奴隷制にもとづけられたローマは、一つの植民的政策を追求し帝国主義を実行した。しかし、社会的・経済的諸体系のあいだの基本的差異を無視する、あるいは、それを背後に押しやる、帝国主義についての『一般的』論考は、必然的に、ちようど『大ローマと大ブリテン』との比較のような、もつとも無味乾燥な陳腐あるいは自慢にまで墮落するのである。資本主義の以前の諸段階における資本主義的植民的政策でさえ、金融資本の植民的政策とは本質的に異なつているのである」。V. I. Lenin. *Selected Works*, Moscow 1952, Vol. I, part 2, p. 517.——なお、レーニンによれば、資本主義の最高段階というのは、「寄生的あるいは頽廃的資本主義」(ib., p. 564) であり、あるいは、「移行における資本主義、または、より正確にいつて、瀕死の資本主義」(ib., p. 566) であるという。

** Arnold J. Toynbee, *Civilizaion on Trial*, London 1946, p. 8.

もし帝国主義が資本主義の最終段階に固有の現象であるとすれば、資本主義を止揚して社会主義的あるいは共産主義的体制を樹立した（あるいは樹立したと誇称する）国民のもとには、当然、もはや帝国主義は一カケラも存在しないと言われるであろう。周知のようにソ連のプロパガンダはこうした立場にたち、かくて帝国主義をアメリカその他の資本主義諸国の独占物とみなすと共に、ソ連自身は完全に非帝国主義あるいは反帝国主義の立場にあるかのように言い触らしている。だが、こうしたプロパガンダをそのまま呑んでしまうためには、ひとは世界政治の実体そのものに全く無知でなければならない。いわゆる「衛星国」に対するソ連の政治が多分に帝国主義的であることは、偏見なしに世界政治を見ようとする人々にとって、いまや一つの常識以外の何ものでもないからである。たとえばエーベンシュタインは語っている。「共産主義の主要な弱みは理想と現実との間の喰いちがいである。それの指導者たちは、人類の再生のための高い理想を宣布しつつ、しかも非人間的な手段を、抑圧的専制政治の年古りた道具を用いている

のである。……最後に、約束と実行とのあいだのギャップは、諸国民の自由に関して明白に看取されることができる。共産主義者の約束はすべての国民の国際的兄弟関係と平等とである。だが、ソヴィエト・ユニオンの内部においても、近年偉大なロシア人の熱烈な崇拝がきずき上げられ、そしてソヴィエト・ユニオンの外部では、ロシア人は明白かつ冷笑的に帝国主義的な対外政策を遂行してきたのであった。一九四八年におけるチトーの罪は、資本主義のために共産主義を放棄したところにあったのではない。かえってユーゴスラヴィアの人民のために国民的自由とモスクワからの独立とを取り戻そうと試みるという、遙かに一層悪質な犯罪であったのである……」。*

* William Ebenstein, *Today's Isms*, 2 ed., 1958, pp. 68-69.

あらゆる民族は「生への衝動」のゆえに根源的に自愛的であり、かかるものとして他の諸民族から独立に自己の存在を保持し形成せんことを希求する。この希求の実現がすなわち主権的国家の創設であり、その意味で国家は民族主義のゴールであったのである。だが、ひとたび国家を創設し、かくて自己の主体性を確立した民族において、かの「生への衝動」はより積極的な形をとり、かくて、他の民族の犠牲において自己の社会的・経済的・政治的優位を樹立しかつ維持しようとの求心的自愛が誕生する。すなわち国家を媒介して、民族主義は帝国主義へと変貌するのである。だが、一民族の帝国主義は必然的にその犠牲獣たる被抑圧民族における熾烈な民族主義を喚起せざるをえない。かくて世界の歴史、わけてもルネサンスこの方の近代の歴史は、民族主義→国家→帝国主義→民族主義といった循環過程を辿って発展してきたのである。その間に介在したものはもちろん幾多の流血であり戦争であった。しかし、戦争技術の非常な進歩、わけても原爆あるいは水爆といった人類破滅的な大量殺人装置の発明は、いまや諸民族に、右にいわれたような循環過程の切断・止揚を要求しつつあるものとも言える。わたしはのちにこの問題にいま一度立ちかえる機会をもちたいと考えている。

三九　植民地主義

わたしはさきに（一四において）、「一つの土地に囲いをして……」という言葉に始まるルソーの文章を引用した。わたしはいまその文章を摸してつぎのようにも語りうるのでないかとおもう。いわく、「一つの土地に侵入あるいは上陸して、『これは私のものだ』と宣言することを思いつき、そしてそれに反抗するだけの力をもたぬ無力な先住民を見いだした最初の国民が、植民地主義の真の建設者であった」。

植民地はいろいろの仕方で作られる。しかしいずれの場合にも、他者の犠牲において自己の領土を拡大し、自己の富を、生産原料を、また市場を増殖しようとする一国民の利己的自愛なしに植民地の歴史は考えられえない。すなわち強大な国民のエゴイズム、このエゴイズムに対する弱小民族の隷従、これが植民地主義の基本形態だと言われねばならない。

植民地主義の歴史は古い。しかしそれが真に地球的規模において展開されたのはもちろん近代の現象にぞくする。近代の植民地主義における第一の絶頂は一七七五年頃に到達された。そのとき、全アメリカ大陸とそしてアジアおよびアフリカの多くの土地がヨーロッパによって支配されたのであった。その後の五十年間にアメリカは自由を戦い取り、その代りヨーロッパ諸強国はアジアへの侵攻をより一層おし進めたのであった。ついで第二の絶頂は大体一九〇〇年において到達された。そのとき地球表面の半分と地球人口の三分の一とが植民地的所有に帰属したのであった。

近代の植民地の歴史は主としてヨーロッパ人による非ヨーロッパ人征服の歴史であった。あるいは、キリスト教国民による非キリスト教諸民族の抑圧の歴史であった。いうまでもなくキリスト教の真の教義は神への愛と相即した隣

人愛の一語につきる。そしてここにいう隣人は理念としては全人類を包含すべきである。しかるにそうした宗教を奉ずると自称する諸国民によって人類の極めて多くの部分がながい間奴隷的に抑圧されて来たのである。そこに歴史の一つのイロニーがあったと言える。しかし同時にまたそこに真のキリスト者がじつは例外的現象であり、大多数のキリスト者にたんに名目的なキリスト者たるにすぎないことが示されてもいるのである。

「植民地」“colony”を定義してオルガンスキーは語っている。それは「外国によって支配され、その住民は十分の政治的権力を与えられていない一つの領土である」と。こうした植民地はさらに「居留植民地」settlement colony と「搾取植民地」exploitation colony とに区分される。前者はかなり多数のヨーロッパ移住民が永住的にそこに居留する地域をさし、それに反して後者は、ヨーロッパの住民が極めて少数であり、しかもそれが主として行政官、商人、宣教師、軍人、その他、一般にその植民地を彼らの永住の地とはみなさない人々から成っているところの地域をさすものだという。すなわちそこでは「ヨーロッパ人たちはただ植民地を搾取するだけであって、そこに定住しないのである」。**

* A. F. K. Organski, *World Politics*, New York 1958, p. 223.

** ib., p. 232.

ところで、右の区分のように一方を搾取植民地と名づけ、他方をそれと別の名で呼ぶ場合には、あたかもこの他方は搾取となんの関係もないかに誤解されるおそれがないではない。そこでオルガンスキーは「この命名は混乱を生じてはならない」として、直ちにつぎのような注意を附加するのである。いわく、「広い意味では、すべての植民地は搾取される。しかし居留植民地においては、植民地の搾取は、主として、全住民の大多数あるいは少なくとも大きい少数を形成するヨーロッパ居留者たちの利益のためのものであるに反し、搾取植民地にあっては、搾取はもっぱら母

国、ならびにその植民地における母国の利益を代表する一握りのヨーロッパ人のためのものなのである。すなわちいずれの場合にも、もちろん、植民地の原住土着民は搾取されるのである（もっともそれは、もし彼らがその領土に留まることを許されるとすれば、であるが）」。*

* ib., p. 232.

白人による有色人種の奴隷化、植民地化、いわゆる「キリスト教的植民制度」がいかに残酷な形で行われたか、いかに多くの涙と汗と無垢の血が、敬虔なキリスト教徒のエゴイズムの犠牲となってこの大地に流されたかを、マルクスは、さまざまの悽惨な実例をもって明らかにしようとしている。しかしわたしは今それに立ち入ることをえない。ただマルクスによって引用された W・ハウィットのつぎの言葉を孫引きするだけにとどめておきたい。ハウィットは語っている。「世界のあらゆる領域における、また彼らの征服しえたあらゆる民族に対する、いわゆるキリスト教人種の蛮行と無道な残虐行為とは、世界史のいかなる時代にもその比を見ず、またどれほど野蛮かつ蒙昧、無情かつ無恥な人種にあってもその比を見ないものである」。*

* Marx, Das Kapital. Bd. I, op. cit., S. 791.——マルクスはハウィットのこの言葉をつぎの書から引用している。*William Howitt*: „Colonization and Christianity. A Popular History of the Treatment of the Natives by the Europeans in all their colonies." London 1838. S. 9.——なお、この点に関連してラッセルのつぎの言葉も参照されてよい。「アメリカの発見この方、名目上はキリスト教的な諸国民の歴史における最も恥ずべき章の一つはそれ〔白人とアフリカ人との関係〕であった。最初に居留された北・および南アメリカの諸地方は暑かった。それで白人たちは有色労働なしにはその地方は開発されえないと考えた。アメリカ・インディアンを労働へと強制することは不可能であった。それゆえ頼みの綱はニグロに求められた。……奴隷の生活は非常に困苦な生活であった場合も、そうでなかった場合もある、通例、家内奴隷はかなり寛大に取り扱われた。だが栽培地奴隷は残酷に搾取された。奴隷売買は十七世紀の初めに終わりを告げ、合衆国における奴隷制は南北戦

争によって終わった。しかし有色住民はその後も堪えがたい困苦と不正と残酷とにさらされて来たし、現にさらされてもいるのである。そして白人たちは残忍な仕方で彼らの優勢を主張することによって道徳的堕落を蒙っているのである」。B. Russell, *New Hopes for a Changing World*, London 1951, p. 103.――なをこの点に関しては、カントが、他の民族に対するヨーロッパ人のおどろくべき不正を指摘しつつ、「不義を水のように飲みながら、正教の選民とみなされんことを欲する諸列強」について語っていることが参照されてよい。Kant, Zum ewigen Frieden, Werke(Ak. Ausg.), Bd. Ⅷ, S. 359.

キリスト教人種のそうした残忍性に関連してわたしがとくに興味を感ずるのはゴビノーの著書の一つの個所である。ゴビノーが白色人種優越の観点からして『人種不平等論』をものしたことは周知の通りである。その第十六章はつぎのように標題されている。いわく、「彼らの相互関係における三大人種の諸特質。混合の社会的諸結果。白色人種の、その中でもまたアリアン系人種の優越性」。ここに三大人種というのはいうまでもなく黒色人種、黄色人種、白色人種である。第一のものについてゴビノーは語っている。「黒色人種は数において最少、かつ最低の段階を占めるものである。彼らの骨盤の形状に表現された動物性の性格は、受胎の瞬間からして彼らに彼らの運命を強制する。彼らは精神的にみて決して最狭の範囲から脱却すべきではないのである……」。しかしわたしが特に興味を感ずるのは、黒人についてのゴビノーのつぎの言葉である。いわく、「最後に彼は、ひとしく彼の生命にもまた他者の生命にも殆んど価値をみとめようとはしない。彼は好んでただ殺さんがためにのみ殺すのである er tödtet gerne, um zu tödten。そしてあれほど容易に運動させられるこの人間機械 menschliche Maschine は、苦悩に当面したとき、あるいは喜んで死へと逃避する臆病さか、でなければ恐るべき無感覚性かをのみ示すのである」。* すなわち黒人は自己の生命をも他者の生命をもすこしも重視しないという。しかるに、それとのあざやかな対比において、ゴビノーは白色人種についてつぎのように語っているのである。いわく、「白人たちはさらに生命に対する一つの独自の愛 eine eigenthümliche Liebe zum Leben によって優越する。彼らは生命をよりよく用いることを知っているがゆえに、自

己自身においてもまた他者においても、生命により以上の価値を附与し、それをより以上愛惜するものと思われる。彼らの残酷性は、たとえひとたびそれが行使されたとしても、それの行き過ぎを自覚する。――これは黒人においてはその存在の極めて疑わしい一つの感覚である」。** そのようにゴビノーは生命に対する黒人と白人との態度を全く対蹠的なものと考えようとした。しかるに右に言われたように、黒人その他の有色人種に対して世界史に比を見ざる残虐行為を、しかも長い年月にわたって加えたのは、ほかならぬキリスト教人種、「自己自身においてもまた他者においても、生命により以上の価値を附与し、それをより以上愛惜する」はずの白色人種であったのである。わたしはここにも一つのイロニーを、いわば文化のイロニーともいうべきものを感ぜざるをえない。

* Gobineau, *Essai sur l'inégalité des races humaines*, 1853-55. ――わたしはこの書のフランス語原典を見ることをえなかった。わたしの参照したのはつぎの独訳本である。Versuch über die Ungleichheit der Menschenracen, Vom Grafen Gobineau, Deutsche Ausgabe von Ludwig Schemann. Bd I, 4 Aufl., Stuttgart 1922, S. 279.

** ib., S. 281.

さきに見られたように、植民地主義の第一の特徴はヨーロッパ人による有色人種の仮借なき搾取であった。すなわち主として前者の経済的衝動にもとづく侵略行為であった。それが究極においてわたしのいう利己的自愛（一三を参照）に発するものたることは明らかであろう。マルクスが植民地の問題をいわゆる「産業資本家の生成」との関連において、また前述されたように、レーニンがそれを資本主義の一定段階との相即において取りあげたのも、彼らが植民地主義のこうした利己的・経済的側面をとくに重視したことを物語るものにほかならない。ところで、右のゴビノーの言葉からしても明らかなように、植民地主義の第二の特徴は、有色人種に対する白色人種の優越性意識、あるいは選民意識である。それはヨーロッパ諸民族のイデオロギー的感情に発するものと言われてよい。そしてその根柢をなすものはわたしのいう主我的自愛（一三を参照）なのである。ルソーのいわゆる l'amour-propre である（一および七を参照）。

この点についてオルガンスキーは語っている。「植民関係を理解するための鍵は、それが優越者と劣等者とのあいだの関係だという事実のうちに存している。植民地の劣等性はもろもろの政治的権利の領域において最も明白であるが、しかしそれは同様に、経済的および社会的領域にも及んでいる。たんに政治的諸制度のみではない。さらに植民地内部での主要な経済的企業もまた外国人によって管理されているのである」。そしてこうした事実上の優劣関係に照応するものがイデオロギーの面における白人の優越意識なのである。オルガンスキーによれば、ヨーロッパ人、とくに北西ヨーロッパ人は、彼らの植民地の非ヨーロッパ的住民を、社会的、文化的、および人種的に劣等なものと考える慣習をもっている。その人種と文化とが自分自身のそれらと異なる民族と接触したとき、ヨーロッパ人は、彼自身の方が優越したものだということを最初から自明のことと考えたのであった。したがってもし土着民たちがヨーロッパ人の宗教と異なる宗教を有するとすれば、彼らは直ちに「異教徒」として蔑視される。もし彼らの生活様式がヨーロッパ人のそれと異なるとすれば、いうまでもなく彼らは「不道徳的」である。またもし彼らがヨーロッパ人の強制通りに労働しないとすれば、彼らは「怠惰」である、等々。要言すれば、ヨーロッパの植民者たちは、彼らの生活あるいは思想の標準を絶対的なものとし、そしてそれと合致しない一切の風習・慣行をすべて蔑視し敵視したのであった。もっとも、こうした見方は植民地主義の最盛時に比して今日ではやや寛和されてはいる。にも拘らず、「今日でさえ、通常のヨーロッパ人およびアメリカ人は、一般に、非ヨーロッパ人に対して彼自身を優越したものと考えている。この態度は植民地気質の一つの本質的な部分であり、それなしに植民地主義は決して存在しなかったであろう。というのは、ひとは、自己と同等と考える民族を永久的従属のうちにおき、これを搾取するといったことは決してしないだろうからである。だが、もし優越性のこの感情がまず最初に植民地主義を可能ならしめるのに寄与したとしても、それの継続は、後年にいたって、植民地主義の終末を促進するのに寄与したのであった。けだし、彼らの自

由への闘争において植民地の住民たちを結合させるのに有力に作用した最強の力の一つは、彼らの征服者が彼らを同等者として受け入れることを拒絶したことに対する、彼らの共通の怨恨 their common resentment だったからである」。*

* Organski, op. cit., p. 224.

同じことはラッセルのつぎの言葉にも見られる。いわく、「インドにおいてイギリス人が権力を握っていた間中、彼らはすべてのインド人を劣等者として遇し、たとえどのような資格をもつ者であれ、ともかくインド人を白人のクラブへ入場させることを拒絶したのであった。これは全く弁護の余地なき謬見である。というのは、いかなる点からみても、ネールのような人が、白人の最善者にくらべてさえ、劣等であるなどとは到底言われないからである。イギリスの支配に対する反抗に極めて大きい関係のあったのは、イギリス人の社会的横柄 British social insolence であった。だが、そうしたすべては、幸福にも、いまでは過去の歴史である」。*

* B. Russell, *New Hopes for a Changing World*, op. cit., pp. 106-7. —— 人種的優越意識がもっとも露骨な形で現われたのは、周知のようにナチ・ドイツにおいてであった。エーベンシュタインは語っている。「人種主義と帝国主義とは、諸国民の社会に適用された二つの基本的ファシスト的原理、すなわち不平等と暴力との二原理を表現する。国民内部において、ファシスト的教義は、エリートは他の者に優越したものであり、かくて自己の意志を暴力をもって彼らに強制することをうると主張する。同様に、諸国民の間では、エリート国民は他者に優越し、他者を支配する資格があるとされるのである。その人種主義的および帝国主義的諸政策において最も極端に走ったのはドイツ・ファシズムであった。一つの直線がドイツ・北欧「人種」の優越性の諸理論から幾百万の人々の大量殺人へと通じていたのであった。世界支配のドイツ的目標は民族根絶 genocide によるある民族の抹殺と、そして他の民族の奴隷化とを含んでいた。イギリスおよびロシアの予期された敗北のあと、つぎのリストに載っていたのは合衆国であった。日本の人種理論は「共栄」の思想のうちにその実際的・帝国主義的表現を見いだした。この共栄のもとで、日本は、アジアおよび太平洋を搾取することによって栄えるべきはずであった」。Ebenstein, *Today's*

Isms, op. cit., P. 101.

右にオルガンスキーは、自由のための闘争へと原住民を決起させた大きい動機の一つが白人の蔑視に対する彼らの共通の怨恨であったことを指摘した。ラッセルもまたインドにおける反英運動に浅からぬ関係のあったのは、イギリス人の社会的横柄であったことを指摘した。そのことは、わたしがさきに「服従の論理」について、また「不平等の止揚としての革命」について語ったことが、諸民族の関係についてもそのまま妥当することを示唆するものであろう。すなわちわたしはつぎのように語ったのであった。いわく、「僭主的支配に対してひとは一時は忍従する。それはしかし、そうした不当な支配をはね返すだけの力をもたぬ場合に限られている。というのは、人間のうちにはつねに自由と平等へのやみがたい憧憬が潜んでいる。すなわち人間は、理由なしに暴政に屈するには、あまりにも自愛的であるのである。死か、然らずば忍従か、これが忍従者に課せられた二者択一であった。しかし、不当な、抑圧的な支配をはねかえすだけの力を自覚したとき、かくて、生への希望をもって暴政の軛から脱しうる可能性をつかんだとき、ひとはもはや奴隷的な忍従に甘んじようとはしないであろう。かえって決然として、抵抗、反逆、革命へと立ちあがるであろう」（二三を参照）。また、「さきにシエースは『無』としての第三階級について語った。右にマルクスはプロレタリアートの状況を『人間の全き喪失』として捉えようとした。それはいずれも、生への根源的衝動、わたしのいわゆる根源的自愛の可能性を全く剝奪された階級をさすものと言われていいであろう。そしてこれらの階級をこうした限界状況へと追いつめた一つの本質的契機が、あるいは貴族階級の、あるいはブルジョア階級の、エゴイスト的・自己中心的な自愛、いわゆる求心的自愛であったことは、改めて指摘される要を見ないであろう。すなわち一つの階級のあまりに露骨な求心的自愛が、いま一つの階級の根源的自愛そのものを脅かそうとするのである。こうした不当な事態を打破して人間の尊厳を回復しようとするやみがたい熱情に発するもの、それが一般に革命と呼ばれ

るものにほかならない。したがって革命は、これを簡潔に規定すれば、支配階級の不当な求心的自愛から自己を守ろうとする被支配階級の根源的自愛の発露である、と言われていいであろう」（二五を参照）。ここに支配階級といわれたものを支配国民と改め、被支配階級といわれたものを被支配民族と改めれば、以上の言葉はそのまま移して植民地主義の終焉の歴史を物語るものとなるであろう。

さきに言われたように、近代の植民地主義の第二のピークはほぼ一九〇〇年頃に到達された。そしてそれ以後、すなわち二十世紀の初頭から現在にかけて、植民地主義は次第に衰微の一途を辿ってきたのであった。いわゆる「アジアの反逆」あるいは「アフリカの覚醒」として語られる現象がそれである。それまで白人の支配のもとに忍従してきた有色諸民族が次第に民族平等の理念に目ざめ、かくて寄生虫・白人の貪欲な搾取と高慢な優越意識とを打破すべく立ち上がったのである。帝国主義に対する民族主義の反撥である。ところで、いわゆる後進諸民族に対してそうした自由のための闘争を可能ならしめた最も主要な原因の一つは、疑いもなく、すぐれた指導者を中心として形成された緊密な民族的結合であったであろう。ネール、毛、スカルノ、ナセル、こうしたすぐれた民族指導者を考えることなしに現在の世界情勢を理解しえない理由はまさにそこに存するのである。この点に関しては、わたしがさきに「組織のちから」について語ったつぎの言葉が想起されていいであろう。いわく、「組織は力であり、未組織的大衆は無力である。そこからして古来のあらゆる支配階級は、いわゆる『支配せんがために分割せよ』divide ut regnes. の原則にしたがって、被支配階級をながく分散の状態にとどめようと努力してきたのであった。それに対して被支配階級は、多くはながい抑圧と迫害とを経験したのち、次第に団結の、組織の必要を痛感するにいたった。しかしそうした組織への憧憬はたんにそれのみとしてはなお無力であり、それが真に一つの組織にまで結実するためには、そこにいわば『点火する者』、すなわちイニシアティヴを取るものが現われるのでなければならない。すなわち一人、あるい

は数人の、いずれにしても比較的少数の能動的な指導者が現われて、いわゆる『諸意志の加算』を試みるのでなければならない。そこに被支配者における政治的活動の端緒はあるのである」（二五を参照）。

しかし諸民族の自由と平等との原則は一挙に到達されるにはあまりにも大きい理念である。たしかに「植民地」の名をもって呼ばれる旧来の隷従民族は今や次第に影をひそめつつある模様である。だが、それと平行して、あるいは「経済的従属国」、あるいは「衛星国」などという新しい名をもった隷従民族の生じつつあることも否定すべからざる事実である。すなわち強大な民族あるいは国家と弱小な民族あるいは国家とが同一の地球表面に共存するかぎり、前者の側にその自愛の求心的な発現、すなわち帝国主義の生ずべきは殆んど必然の事態でなければならないのである。だが、それに対して後者の側に自己の根源的自愛の可能性を死守しようとする努力、まさに民族主義的な抵抗の生ずべきこともまた同じく歴史の必然にぞくする事態と言われなければならない。いわゆる「衛星国」について言えば、一九五三年六月の東ドイツにおけるストライキおよび暴動、一九五六年六月ポズナンに発火したポーランドの動乱、そして同じ年の十月ハンガリアに生じたあの悲劇的な事態は、すべて、ソ連の帝国主義的政策に対する諸衛星国民の民族主義的抵抗の発現と見らるべきものであるであろう。だが、現在においては、ソ連の軍隊とタンクとは、そうした諸民族の抵抗を排除するに十分に強力であるように思われる。したがって地球上のあらゆる民族が、たんに名目的ならぬ真の自由と平等とを享受しうる日は、なお無限定的な未来にぞくすると言われねばならないであろう。

四〇　諸強国間の関係について

前節にみられた植民地主義は、一方強大な民族あるいは国家と、他方弱小なそれらとの間に生ずる関係であった。だが、いつの時代にも、ある程度互角の力をもった諸強国が地球上に並存してきたことは争いえない事実である。で

は、これら諸強国は、多くの場合、どのような関係をもって相互に並存してきたのであろうか。

わたしはさきに（一〇において）、個人あるいは他のより小さい集団にあっては、それらの対立・相剋を規整するものとして実定的な国家の法が存するのに反し、国家間の対立にあってはそうしたものが存しないという不都合な事態を指摘し、そこからして、たとえばホッブスが、国家と国家、王と王とは、「不断に剣闘士の身構えにある」と語ったこと、またスピノザが「二つの国家相互の関係は、自然状態における二人の人間相互の関係と同様である」と語り、また「二つの国家は本性上互いに敵である」と語ったこと、さらにまたヘーゲルが「諸国家のあいだにはいかなる大法官も存せず、たかだか仲裁裁判官、仲介者があるにすぎない」と考え、そこからして、諸国家のあいだの紛争は、つねに究極においては実力の行使、すなわち戦争によって決定されなければならないと考えたことを想起しておいた。このことはニューヨークに国連本部の壮大なビルディングの聳立する現在においてもある程度までは真として妥当する。なぜなら国連憲章をはじめ、諸国民の意志と行動とを拘束すべきはずの多くの国際諸法規は、現在のところ、いまだ一つの理念的規矩たるにとどまって、なお国家の法に匹敵するだけの実効性を十分に保障されているとは考えられないからである。もっとも、怖るべき核兵器の出現がいわば戦争への誘惑をいちじるしく弱め、その結果、諸強国は、好むと好まざるとを問わず、まさにそれの自愛的関心そのものに促がされて、次第に平和的共存の方向に進まざるを得ない状況へと追いつめられつつあることは事実であり、そのかぎり、国際連合あるいはそれに類似の国際的機構が次第に諸強国によって重視される日の到来するだろうことは十分に期待されてよいところである。だがそれはいずれにしても未来のことであり、現在において諸強国がなお戦争への権利を全くは放棄していないことは事実である。そのかぎりにおいてわれわれは、『共産党宣言』巻頭のかの有名な言葉を摸して、「すべての従来の国際社会の歴史は民族闘争――その端的な表現としての戦争――についての歴史である」と語ることもできなくはないであろう。

なぜなら実際に砲煙のあがっている期間のみが戦争の期間であるのではない。かえってホッブスの語ったように「戦争とは、格闘や戦闘行為のみを意味するのではなく、闘争行為に訴えて争おうとする意志が十分にみとめられる期間を意味する」*からである。この意味において、二、三の強国が、核兵器とかミサイルとかいった怖るべき戦争手段の生産に狂奔しつつある現在はたしかに戦争の期間にぞくするものと言われてよい。現代人の一人はそれを巧みにも冷戦と命名したのであった。

* Hobbes, *Leviathan*, P. I, ch. XIII.

外交辞令的にはどこまでも友好的、しかしその内心の深みにおいてはあくまで敵対的ないくつかの強国が地球上に存在するとき、それらは相互にいかなる態度を取ろうとするであろうか。いろいろの場合が考えられるであろう。しかし究極的には二つの場合が考えられる。一つは、彼らの各々が、他の諸強国を自己の支配下に抑えることによって自己の絶対的安全性を確保しようと努める場合である。いわゆる帝国主義の積極的発現である。いま一つは、より消極的に、各強国が自己と他者との間にいわゆるバランス・オブ・パワーを保つことによって、少なくとも自己の相対的安全性のみは保持しようと努める場合である。まず第一の場合について。

A、支配的国民と世界政治的ピラミッド。――一つの国家が完全に全世界を自己の支配下に収めたという事例は今までの世界史には見られない。しかし比較的それに近いと見られる現象は必ずしも絶無であったわけではない。古代のローマ帝国、あるいは十九世紀の大英帝国などがその一例として挙げられよう。また、ともにロシア民族の頑強な抵抗によって挫折したとはいえ、ナポレオンによって率いられたフランス国民、またヒットラーの指導下にあったドイツ国民の意図したのも、そうした世界制覇の野望であったであろう。それは要言すれば、世界の一元化、あるいは一中心化の試みであると言われてよい。この試みが成就したとき、国際的政治圏は、一つの支配的国民を中心とし、

他の諸国民を周辺とする一つの太陽系的構造をもつものとなるであろう。あるいはそれは、一つの支配的国民を頂点とし、その下にもろもろの国民が、力の強弱に応じて、あるいは中間層を、あるいは広やかな底辺を占める一つのピラミッドとして表象されることもできるであろう。

古代から現代にかけて、あらゆる強国の理想あるいは願望は、そうした支配的国民として他の諸国民を制圧するところにあったであろう。なぜならあらゆる民族、またそれの政治的組織としてのあらゆる国家にとって、最初の、最小限の、かつ至上の要求たるものは自己保存のそれであり、そこからして、国家にとってはそれ自身の存立を維持すること以上に崇高な義務は存しない――マキアヴェリのいわゆる「国家理由」がそれである――とも考えられるのであるが、こうした国家の要請は、自己の存立を脅かすおそれのある他の一切の国家を前もって自己の支配下に抑えることによって初めて真に確固たる保証を獲得しうるからである。すなわちさきに（三六において）言及された「先手の論理」は国際間の権力闘争においてもまた十分に妥当するものであったのである。「攻撃は最善の防禦手段」と考えられるのもそれにもとづくものにほかならない。すなわち国家にあっては、自己保存は必然的に自己拡大に、究極においては世界制覇につらなるのであり、そこに民族主義が国家を媒介して帝国主義へと転換すべき必然性（三八を参照）は存したのである。

トインビーは一八九八年のイギリス――それはヴィクトリア女王即位六十年祭の盛大に挙行された年であった――を回顧しつつ語っている、当時のイギリス人、とくにその中産階級の人々は、「彼らの太陽がその天頂にあるのを見、そしてそれはそこに静止すべきものと想定したのであった」と。すなわち彼らは「時の静止」a stand-still of Time という奇蹟を信じようとしたのであった。というのは、「彼らの見るところ、歴史は、彼らにとって終わりを告げていたのであった。外政問題においては、一八一五年、ワーテルローの戦いと共に、内政問題においては、一八三二年、

選挙法改正法案と共に、そして帝政問題においては、一八五九年、インド暴動の鎮圧と共に、歴史は一つの終末に到達したのであった。そして彼らは、歴史のこの終末が彼らにもたらせた恒久的幸福状態を自ら祝福すべきあらゆる理由を有したのであった」。*——おそらく古代のローマ人もまた、彼らの全盛時代において、それと同様に「時の静止」を、「歴史の終末」を信じ、そして彼らの恒久的幸福状態を自祝すべきあらゆる理由を有したであろう。

* Toynbee, *Civilization on Trial*, op. cit., pp. 17-18.

国際的政治圏において一つの国民が圧倒的な優勢を保持し、かくて絶対的な意味においてではないまでも、少なくともある程度の世界制覇を成就したとき、その支配的国民自身はもちろんその自愛を十全に満たしえてこの上なく幸福であると共に、また世界そのものもある程度の平和を享受することが可能である。いわゆる Pax Romana あるいは Pax Britannica の語はそれを示唆するものであるであろう。だが、かの幸福もこの平和もとうてい恒久的なものではありえない。なぜなちそれは他の諸国民の自由の全き犠牲において獲得され、その意味でいわば自由の墓地の上に立てられた幸福であり、平和であるからである。だが他の諸国民はもちろんながくそうした犠牲の境位に甘んじようとはしないであろう。いわゆる top dog としての支配的国民は歴史の車輪がこの一点において永久に静止せんことを希求する。ちようど一つの国家において、支配階級は自己にとって満足すべき現在の状態を永く維持しようとして保守主義的に傾向するのが常であると同様に、国際的政治圏においてもまた、支配的国民とそしてそれに同調していわゆる「獅子の分け前にあずかろうとする」諸国民とは、自己にとって有利な現在の国際秩序をながく保持しようとして保守主義的に傾向する。しかし、underdog の地位にある他の諸国民はもちろん「時の静止」をも「歴史の終末」をも信じようとはしない。かえって彼らはあるいは個々に、あるいは連合提携して、歴史の車輪を大きく回転させようと努力するのである。いな、そうした諸国民のみではない。支配的国民そのものの内部においても、いわゆ

る status quo に満足せず、かくて古き秩序に代る新しき秩序の樹立を待望あるいは企図しつつある階級がつねに幾分かは存するのである。* かくて一元的あるいは一中心的な世界秩序は、かりにそれがひとたび完成されたとしても、とうてい永続的なものではありえない。すなわち一国民を頂点とするかの世界政治的ピラミッドは、いわばそれ自身の中枢にそれの崩壊の契機を蔵するものとして、どこまでも世界史における一つの過渡的段階たるにすぎないのである。

* わたしはここで「民族」あるいは「国民」について語つている。しかしさきに（三七において）「階級」について注意されたのと同様に、民族あるいは国民もまた決して凝結的・固体的なものとして捉えらるべきではない。かえつてそれもまた自由意志的な、あるいは恣意的な個々の人間から成る集団として、どこまでも流動的・気体的な構造のものと考えられるのでなければならない。たとえばわたしは右に世界制覇の野望を逞しうしたものとして、ヒットラーの指導下にあつた「ドイツ国民」をあげておいた。だが、言うまでもなく、当時ドイツに国籍を有したすべての人間がああした帝国主義的な意図をもつていたわけではない。かえつて多くのドイツ人はナチの政策に大きい不満をもち、鋭い批判を内心ふかくたくわえていたであろう。したがつて世界制覇の野望をもつたのはじつは当時の「ドイツ国民」であつたのではない。かえつてそれはドイツの「政府」であつた。いな、究極においては当時のドイツ最高首脳者としてのヒットラー個人であつた、といつた議論も十分に成り立つものと見られていいであろう。しかし、一個の個人がたんに一個の個人にとどまるかぎり、世界史は彼の意志によつて動かされるにはもちろんあまりにも巨大かつ重厚である（三七を参照）。したがつてたとえああした夢想的野望が、その起原において、ある日ある場所でヒットラーと呼ばれる一個人の脳裡に誕生したものであつたとしても、しかもこの一個人が、彼の強力な統率力を通じて、当時の政府・警察・党・軍を指揮しうる地位にいなかつたとすれば、また、これらの機関を通じて、当時のドイツ国民からある程度の同意的支持をかちえていなかつたとすれば、そうした妄想はもちろん泡沫のごとくに消え失せねばならなかつたであろう。すなわちさきに（三四において）言われたように、「政府の首脳としての主体は政府機関という実体と十分に相即せずしては真に実力ある主体たることをえず、さらに政府そのものは国民大衆をふくむ国家を実体とすることなしには真に能動的な主体たることをえない」のであり、そのかぎり、たとえ当時のドイツに多くの反ナチ的国民が存したとしても、ヒットラーと彼の政府とをしてああした大がかりな企図に出ることを可能ならしめたものは、やはり当時の「ドイツ国

民」であったと言われねばならないのである。――すなわちわれわれが「民族」あるいは「国民」について語る場合、われわれはそれをどこまでも「人間の集団」として流動的・気体的に捉える必要があると共に、同時にまた、国際的政治圏について語る場合、そうした人間集団をある程度「一つの意志」をもった統一体として取り扱かう必要があるのである。もちろん、革命のさなかのように、一国民がハッキリと二つの敵対的なグループに分裂しているような場合は別であろうけれど。

B、バランス・オブ・パワーと危機の時代。――十九世紀から二十世紀の初めにかけて、イギリスは明らかに世界ピラミッドの頂点に位置する支配的国家であった。だが、それからわずかに半世紀を経過した現在、イギリスはすでにアメリカ連邦のかげに隠されて世界政治的には第二流国家にすぎないかの観を呈している。そして現在アメリカ連邦に大きく対立するものはソヴィエト連邦であり、かくて世界はいまや一方アメリカとその同調国、他方ソ連とその同調国との二つのブロックに分かれて緊迫した冷戦の状態にあるもののように見える。もっとも、中立的な第三勢力と呼ばれてよい国家あるいは国家群も存しないわけではない。だが、それは、現在ではまだかの両陣営の危機的対立を積極的に解消するだけの力はもたないように思われる。かくて、世界は、現在、安定の底に不安底を蔵した二元的・二中心的構造をもってわれわれの前に現象しているわけである。

わたしはさきに（三四において）国際的政治圏を「幾多の星の相関的に散在する多中心的な大空」にたとえておいた。あらゆる国家がそれぞれ自主的・主権的、その意味で自己中心的なものとみなされうるかぎり、たしかに世界は形式的には多元的・多中心的と見らるべき一面を有するのである。しかし実質的には世界はあるいは右のAにおけるように、一元的・一中心的な構造をもつか、あるいはいまわれわれの問題としつつあるように二元的・二中心的な構造をもつかのいずれかであると言われなければならない。というのは、歴史のその都度の段階において、ひとしく中心的な国家の中にもいわば「中心中の中心」とも見らるべき一つあるいは二つの国家が存し、そして他の諸国家は、あるいはそれと同調するか、あるいはそれに抑圧されて、一方さきのAの場合のように一つの世界ピラミッドを

形成するか、あるいは他方今の場合のように互いに対立する二つの世界ピラミッド――あるいは半・世界ピラミッド――にまで分裂せざるをえない傾向を有するからである。この後の場合、対立する両ピラミッドによって求められるものがいわゆるバランス・オブ・パワー、すなはち力の均衡、勢力の均衡、だが最も端的には戦力の均衡なのである。

この均衡についてオルガンスキーは語っている。「独立諸国民、わけても諸強国の政治的諸関係は、伝統的に力の均衡の理論によって説明されてきた。現在の著者たちもまた力の均衡を『国際諸関係の一つの基本原理』(N. D. Palmer and H. C. Perkins)、『一つの一般的社会原理の一表現』(H. J. Morgenthau)、また『われわれの見いだしうるもののうち一つの根本的政治法則に最も近いもの』(Martin Wight) などと呼んだのであった。この力の均衡は学者たちがもろもろの出来ごとを解釈するのに用いてよく、また政治家たちが実際政治への指針として用いてよい道具である。それは人生の政治的諸事実の一つの陳述である――あるいは、人々の言うところではそうである。国際政治に興味を有する多くの政治学者たちは、諸強国を、不断に国際的バランスを建設し、維持し、防禦することに懸命の努力を払いつつあるものとして捉える。そしてこのバランスは、もちろん力のバランスなのである。このバランスは達成することが困難であり、維持することはより一層困難だといわれる。だが、たとえどれほど退屈なものにせよ、政治家は決して彼のこの仕事を手放してはならない、というのは、バランスの維持は国際的な平和と安定性とにとって必須不可欠なのであるから――政治学者たちはこのように考えている」。*

* Organski, op. cit., pp. 271-2.

ついでオルガンスキーはいわゆる勢力均衡論の大体の内容を紹介し、そしてさまざまの角度からしてそれを批判しているのであるが、わたしはいまその詳細には立ち入りえない。ただ一つ、オルガンスキーが、いわゆるバランス・オブ・パワーは決して国際的平和と安定性とに寄与するものではなく、かえってまさにそこにこそ戦争の危機が蔵さ

れていると指摘している点に注意を払っておきたい。というのは、歴史のいかなる段階にも、一方、与えられた世界秩序に十分に満足した諸国民とならんで、他方、現状に満足せず、かえって古い秩序に代る新しい秩序の到来を期待あるいは企図しつつある若干の諸国民の存するのが常である。ところでこの後者は、前者に比して明らかに自己が劣勢であることを自知するかぎり、あえて積極的に前者に挑戦しようなどとは試みない。だが、前者と自己との間の勢力分布がある程度均衡の域に達したことを自知あるいは自信するや、必ず進んで現状の破壊に乗り出そうとする誘惑に駆りたてられるであろう。かくて「平和はただ、優勢を保持する諸国民が堅実に支配し、かつ現状に満足しているとき、あるいは、現状がその仕方で平和な関連のうちに発展すると思われる仕方に満足しているときにのみ可能である。それに反し、平和は、一つの有力な国民が現状に満足せず、しかも、現存の国際秩序を支配している諸国民からの反対にもたじろぐことなく、あえて秩序の変革を企図するに十分なだけ有力となった場合には、つねに必ず脅かされるのである」。*

* ib., p. 325. ――この点に関しては第二次世界大戦の前夜における世界情勢が想起されていいであろう。もつともわたしは当時の一方の陣営、すなわち独・伊・日の枢軸側と、他方の陣営、すなわちソ連をふくむ連合国側とのあいだに、はたして十分なバランス・オブ・パワーが存したか否かは知らない。しかし少なくとも前者がそれを信じた、あるいは錯覚したことは事実であつた。というのは、もしそうでなければ、彼らはみずから進んで戦争の口火を切ろうなどとは試みなかつたであろうから。だが、あの場合とくに重要だつたのは、さきのグループがいわゆる「持たざる国」として現存の世界秩序に不満であり、そこからしていわゆる「世界の再分割」が彼らにとつて至上の要請と考えられたという事情であるであろう。すなわち諸国民のあいだの力の均衡そのものは、それだけとしては、必ずしも戦争の危機を蔵しているわけではない。かえつてそれは、伝統的な考え方の主張したように、平和と安定との一つの条件であるとも言えるのである。ただ、そうした均衡のうちにある一方のグループが現存の世界秩序にふかい不満を抱いている場合には、たしかにオルガンスキーのいうように、力の均衡がかえつて戦争への誘因として作用するのである。第二次世界大戦の前夜における世界情勢を敍しつつカーは語つている。「それゆえ一九三

六年の終りは、世界の極めて大きい部分が二つのグループ、ドイツ、イタリアおよび日本によつて率いられるグループと、フランスおよびソヴイエト・ユニオンによつて率いられるグループとに分割されたのを見たのであつた……対立する両グループは、一つの共通の政治的信念によつて結ばれたというよりも、むしろつぎの事実、すなわち、かの第一のグループは、さまざまの理由からして、一九一九年になされた世界の領土的決定、すなわち第二のグループがそれを維持することを欲していた一つの決定、に不満だつたという事実、によつて結ばれていたのであつた。すなわち基本的な分裂は、世界の富の現に存在せる国際的配分に大体満足している諸国民と、そしてそうでない諸国民とのあいだの分裂なのであつた」。 E. H. Carr, *International Relations between the Two World Wars*, London 1955, pp. 262-3.

力の均衡という概念は一見単純なように見えてしかも決して単純なものではない。というのは、そもそも諸国民の「力」というのが極めて多くの因子の合成からなる無限に複雑なものであり、のみならずそれは不断に変動的であり、したがってかりに一つの瞬間にある程度力の均衡が樹立されたと仮定しても、しかもつぎの瞬間にはそれはすでに崩れていなければならないからである。それゆえ互いに敵対的な関係にある諸国民が力の均衡を求め合う場合、その努力は必然的にいわば悪無限的な過程をたどって停止するところを知らないであろう。というのは、かりに一方の側が一つの同盟国を自己の側に加えたとすれば、他方はただちに自分の側でも新しい同盟国を求めることに狂奔せざるをえないであろう。（ドイツあるいは朝鮮といった一つの国民が、あるいは西と東に、あるいは北と南に両断されているという現在の状態は、それに対する一つのシニカルな象徴であると言われてよい）。あるいはまた、一方が一つの新しい兵器を作り出すことに成功したとすれば、他方は直ちにそれと同じ、あるいはそれと釣り合うだけの兵器を作り出すことに躍起となるに相違ないであろう。（ミサイルの製造においてソ連が一日の長を誇るとすれば、アメリカは「ノーチラス号」による北極圏横断をもつてこれに答えるといったたぐいである）。いずれにしろ力の均衡の追求が諸民族を不断の緊張と敵対性とに駆りやつて、それでなくとも狭きにすぎるこの地球を人類にとつていよいよ

住みがたきものたらしめていることは否定されえない事実である。

諸国民をそうした悪無限的な競争へと駆りたて、かくて世界を不断の危機的状況のうちに投げこむ主要動因の一つが、さきに（三六において）ホッブスによって指摘されたかの Diffidence、すなわち自信のなさ、あるいは臆病であることは、これまた否定されえないであろう。この意味においてわたしは、現在のアメリカあるいはソヴィエトがはたして「強国」の名に価いするか否かを疑うものである。たしかに領土、産業、軍備等々の点において、彼らは現在他の諸国民を圧倒的に引き放しており、その意味で、すなわち「物理的」な意味で、彼らはたしかに強国といわれてよいかも知れない。だが、もしわれわれが諸国民についてもその「魂」を問題とすることができるとすれば、現在のアメリカあるいはソヴィエトはその魂において極めて弱く極めて臆病だといわれねばならないであろう。彼らはある意味で被害妄想のノイローゼ患者と見られてよい。彼らは日夜おそるべき幻影あるいは夢魔にうなされ続けているのである。そうした彼らの臆病からして、自国民に対する、また他国民に対する彼らのヒステリックな不寛容が由来する。――「自由」を立国の原理としたアメリカにも比較的最近マッカーシズムの旋風の吹きすさんだことは周知の通りである――。その限りにおいて、わたしがさきに（三六の一つの註において）語ったつぎの言葉は、対立的関係にある諸国民についてもそのまま妥当するであろう。いわく、「臆病と残酷とはつねに表裏をなすのである。したがってわれわれは、一般に、一つの政権が不寛容かつ残酷であるか、あるいは寛容かつ緩和であるか、に従って、その政権が自己の政治力について有するところの自信のほどを測ることができるであろう」。

十九世紀は一元的・一中心的な時代であった。かかるものとしてそれは比較的平和な時代であった。だがその平和は没落の契機を内蔵した不安定的な平和であった。現在われわれは二元的・二中心的な世界に生きている。そしてそれは明らかに危機的・冷戦的な時代である。諸国民のあいだに一瞬の安らぎも存しえない時代である。ではこうした

危機的な限界状況ははたしてどうした方向にむかって打開さるべきなのであろうか。一元的・一中心的な世界に向かってであろうか。だが、それが到底恒久的な平和を約束しえないことはすでに実験ずみである。では、人類は、いかなる方向へとこの現在の危機を止揚すべきであろうか。

（未　完）